



テーマ
イスラエルの代理出産
代理母と依頼者

Interviewee
Dr. Etti Samama

実施日: 2016年2月3日

—イスラエルで代理出産はどのように行
われていますか?

1996年、イスラエルで代理出産法が成立し、有償の代理出産が合法化された。国内で代理出産を依頼できるのは異性愛カップルに限られている。事前に委員会に申請し許可を得てから実施することができる。代理母は原則として独身(離婚した女性や夫が死去した場合も含む)で出産経験がある女性に限られる(後に既婚女性でも可となり基準が緩和された)。また、ユダヤ法に基づいて、依頼者と代理母は同一の宗教でなければならないなどの要件がある。代理母が出産した後、裁判所のparental order(親決定命令)により依頼者は親となることができる。

1986年から2009年までの間に655の代理出産が国内で行われ、260人の子どもが産まれた。2015年までに1,100件の代

理出産が行われている。

2015年までに1,100人の代理出産が行われ、400人ほどの子どもが産まれている。

代理母は160,000シケルの報酬を貰う。IVFは保険でカバーされているが、それ以外の代理母に関わる費用は全て依頼者が支払わなければならない。

—代理母になるのはどのような女性でし
ょうか?

いままで100人もの代理母にインタビューしてきた。

代理母になるのは22歳以上38歳未満の女性で、優良な遺伝子を持っていることが望ましいと考えられている。事前に様々な医学的検査を実施する。そして、妊娠出産をうまくコントロールできるかどうか、心理的な検査も行われる。

2008年から既婚女性でも代理母になれるようになった。それによって、代理母の社会階層は少しよくなった。それは、よいことだと思っている。しかし、それでも、宗教的な依頼者たちは独身の代理母を好む。今は独身と既婚、だいたい半々くらいではないかと思う。

結婚している女性が代理母になれるようになったことで、相対的に貧しい女性が少なくなり、利他的(altruistic)な動



機の代理母が増えたと言っている人もいるが、実態はそうではない。自分が話を聞いた代理母たちは、皆お金が動機だった。本当にお金に困っていない女性は、1人しかいなかった。どうしようもなく貧しく、極端にお金に困っているというわけではないが、全ての女性が経済的な問題を抱えている。生活のための十分なお金がなく、お金のためにやっているのは間違いない。

たくさんの女性に話を聞いたが、お金以外にも色々な動機があった。たとえば、若い頃にやった中絶の罪悪感から代理母をやりたいという女性もいた。それは、こちらがそのことを質問したわけではなく、女性の方から語ってきて、そうだとわかった。その後のインタビューでは、過去の中絶のことも聞くようになった。過去に中絶の経験を持つ代理母は多い。それは、彼女たちの社会経済的地位が関係していると思う。

低賃金で単調な生活から逃れるために何か特別なことをしたいという気持ちをもって代理出産に臨む女性もいる。例えば、彼女たちはセレブになることはできない。でも、代理母にならなれる。そういう女性は、自分がやったことに誇りを持っているようだ。そして、ある女性は本を書いたり、テレビに出たり、雑誌の取材を

受けたりする。そのことで、自分を特別な存在だと感じられる。そういう女性たちがいることは興味深い。もちろんほとんどの女性はお金が主要な動機で、このような女性の一部に過ぎない。

ミドルクラスの女性たちの中には、旅行に行きたい、キッチンを新しいものに変えたいといった理由で代理母になる女性もいる。それらは彼女たちがもらっている給料では難しい。そんな理由で女性たちが代理母になるのは悲しいことだと思う。しかし、現実にはそういう理由で女性たちは代理母になっている。

何人かの代理母が、(自分も含めて)全ての女性はお金のためにやっている、と言っていた。もし女性がお金のためにやっているわけではないと言ったなら、それは、彼女は嘘をついているということだ、と。イスラエルでは、海外に行ったり、高いものを買ったり、そういったことをできる人たちが沢山いる。それを見て、うらやましいと思うこともあるだろう。しかし、普通の仕事ではそういったことを実現することは難しい。

私が聞いた中では、半分以上の女性が、仕事についていたことがないか、臨時的な仕事、ウェイトレスや家政婦などをやっていて、その仕事の間で求職中であった。彼女たちは何より、お金が必要だ。



代理出産の報酬は高額だが、それでもその苦勞に比べたら十分ではない。たとえば、いろいろ複雑なプロセスをやって一生懸命依頼者に協力しても、失敗したら代理母は期待していたお金をもらえない。代理出産の成功率は4割程度。実際には妊娠さえしない代理母もたくさんいるが、そういうことは誰も言わない。

—代理出産に伴う親密性や感情に関し、どのような課題がありますか？

第一に、代理母に子どもへのアタッチメントの問題はない。子どもへのアタッチメントはないが、情緒的(emotional)な問題は抱えているといえるだろう。しばしば、代理母には子どもへのアタッチメントが生じると言われていて、イスラエルでも代理母は出産経験がある女性という要件がある。経験がないと、子どもを渡したくないという気持ちが生じると考えられているからだろう。なぜだかそのような前提がある。しかし、それは誤った前提なので捨てたほうがいい。国内で裁判をしても勝てないとわかっている。女性はどうのように、そしていつ母親になるのか、ならないのか、それは状況次第だ。最初からわかっていることなので、代理母達は皆よく対処している。したがって、そうい

った問題はないと考えていい。

ある代理母は、子どもを産んだあと帰宅して、(まるで大変だった仕事を終えたように)疲れきって眠りこけただけだったという人もいた。お腹の中に依頼者の子どもがいて、まるで監視されているような、息詰まるような感じからやっと解放されたということだろうか。

代理母を biological parent という言い方をするのは適切ではないかもしれない。彼女は genetic mother でもあるのだから。つまり、エピジェネティクスな変化を通して子どもの遺伝子に影響を与えているのだから。

依頼者もそのことには十分に気がついていて、妊娠中の代理母に様々に介入しようとする。性交しないで欲しい、食べ物はこれ、あれは食べてはいけない、喫煙しないで、ビタミン剤の採取、などなど。宗教的な依頼者ならもっと事細かく色々と要求がある。そして妊娠中、代理母にストレスがなく、幸せな気持ちでいるかも重要だ。しかし、これだけのことをしていても、遺伝的な影響について、依頼者は語りたがらない。

プロセスの間、依頼者と代理母の間には葛藤が生じる。依頼者は代理母をコントロールしようとする。しかし代理母は独立し、他人から命令されることなく、自



分の思うようにしようとする。そこに多くの葛藤が生じる。

国は、契約のときと出産のときに介入するだけだ。それ以外のさまざまな問題は放置されている。たとえば体外受精のプロセスもとてもストレスフルだ。依頼者と代理母と一緒にクリニックにいて治療を受ける。お互いに社会階層が違う人たちだから話も合わない。そして、代理母には妊娠へのプレッシャーがかかる。妊娠しなければ、いろいろな事を言われる。ちゃんと自己管理できてなかった、ちゃんと薬を飲んでなかった、そのせいでもっと時間がかかる、私たちのために妊娠したくないの？ などと言われる。これらは実際に代理母から聞いた話だ。

そして9ヶ月後、どのように出産するか？なども国が決めてくれることではない。出産後、ソーシャルワーカーが来ていろいろ質問していく。そして子どもを渡したら終わりだが、問題はそこで終わりではない。

代理出産の場合、依頼女性の卵子を使っているケースは25%くらい。あとの75%は提供卵子を使っている。夫は自分の精子で、これまでの家族と同じように、遺伝的父親として振る舞っていればいだけだ。しかし、母親は、自分の子どもではないのに、子育てをしなければならない。だ

から、依頼女性に子どもへのアタッチメントの問題が生じることがある。子どもが泣いたりしてもどう対応していいかわからない。代理母に助けを求めようとしても、彼女はもう自分の家に帰ってしまっていていない。子どもを依頼者に渡せば、代理出産のプロセスは終わっているので、国も関与しない。我々のような援助の専門職は、そのプロセスの間ずっとそばにいて、寄り添って、支援しなければならないと思う。

私が知っている例でも、子どもを渡したあとも、代理母と依頼者の関係が継続するケースはある。代理母にとって、エンパワーになるし、依頼者にとってもそれによって失うものは無い。子どもに、どうやって産まれてきたのかを伝え、代理母には子どもの写真を送ったり、小額のプレゼントをしたりもする。出産後、そうした有益な関係性が継続するのであれば、代理出産はネガティブな面ばかりではないといえる。

一人のロシア人代理母にインタビューしたことがある。彼女はヘブライ語もできず、ロシア語しか話せないので通訳を通して話をした。それで彼女のことがとくに心配だった。しかし彼女の依頼者は良い人で、依頼男性から彼女の二人の子ども達のためにコンピュータを買っても



らったり、海外旅行をプレゼントしてもらったりした。それは大きなプレゼントだったが、しかし代理出産の報酬の16,000 シェケル(約480万円)からしたら、たいしたことがないともいえる。代理母はとても感謝していた。

そのように、代理出産でもやり方によって違うと思う。代理母も人間で、モノではない。子どもはいろいろな人間関係の中から産まれてくる。依頼者にとっては、誰か他の女性から子どもが生まれた事実を隠したい気持ちがどうしても働く。しかし、それは無視してはならない。自分の体は自分のものであって、お金で買ったり、他人が指示を出したり命令したりするとはできないのだから。

-子どもへはどのような影響はありますか

子どもへの影響は考えておかなければならないことだ。私が知っている例でも、代理母の12歳の子どもが、母親が出産後、その子どもを連れて帰らなかったことで鬱症状になったことがある。出産後、依頼者は代理母と関係を切りたがるが、彼女たちは、ただ知りたいだけだ。子どもが元気かどうか、両親はいい人かどうか、もしそうでなければ心配になるだろう。

代理母は子どもの写真を見たらそれで満足できる。自分が引き取って育てようという気持ちはない。自分たち家族の子どもではないことはちゃんとわかっているのだから。

また、代理出産で産まれた子どものこともある。代理出産の事実について、子どもにどのくらい伝えられているのか、わからない。養子の場合、イスラエルでは18歳になれば事実を知ることができる。しかし代理出産の事実は秘密にされているのではないか。多くの依頼女性が自分も妊娠しているふりをしてお腹を膨らませている。そして、出産が近づいてきたら代理母と一緒に自分も入院して、なるべく胎児の近くにいる。子どもと絆を強くするためだ。まるで自分が出産したかのようなやり方をとっている。

自分が知っている代理母と依頼者は友人関係で、依頼者は子どもに伝えていなかった。代理母が子どもを叱ったとき、子どもは自分の母親でもないのにそんなこと言わないで、と言ってきた。彼女は自分が母親だと(間接的に)伝えたかったようだが・・・子どもにどう伝えるか、依頼者と代理母がどう関係していくか、簡単なことではないと感じる。

自分としてはもっとオープンにして子どもにも伝えたほうがよいと思う。しか



し、実際にどうなっているか、わからない。親は、今はまだ話してない、子どもはまだ小さく、事実を話すには早すぎるからなどと言っている。非常にプライベートなことなので、調査しようと思っても、子どもになかなか接触できない。だから代理出産で生まれた子どものことは、どうなっているのか、全然わからない。

-1996年に代理出産が合法化された際、依頼者は異性愛カップルに限定されました。非異性愛カップルには認めないということで、宗教勢力の合意を取り付けたという経緯があります。

以来、ゲイカップルは海外で代理出産を依頼してきました。インドやタイなど安価で依頼できる渡航先が近年禁止の措置をとったため、国内で合法化に向けたロビー活動が活発化してきました。シングルや同性カップルなどにも代理出産を認めるという法改正案がありますが、これについてどう思いますか。

昔はゲイカップルの友人の女性が子どもを生んで、共同で子育てをするということもあったようだが、今は代理出産があるので、家族をカップルだけに閉じておきたいという考えになってきている。

子どもを産むのは女性だけなので、ゲイカップルは代理出産がなければ子どもができない。イスラエルでは子どもを持つことは非常に重要で、ゲイカップルでも子どもをもって家族になりたいという願望は普通にある。この点で、ゲイカップルを差別することはできないのではないかと。

ゲイたちは政治的にも経済的にも非常に大きなパワーを持っている。一般に女性より男性の方が所得は大きいし、男性が二人で稼いでいたら経済的に富裕になるのは当然だ。そのように経済的には強者である一方、社会的には差別されている側だということになっている。

海外の市場が閉じたことで、今後、ますます国内でのロビー活動が活発化していくだろう。ゲイだからといって海外にいかなければならない状況はやはり差別的だといえる。もし国内でゲイカップルが代理出産を依頼できるようになったらどうなるか。彼らのために代理母になりたいという気持ちを持つ女性は少ないと思う。イスラエルでは依頼女性と代理母はとても親密な関係になる。ゲイカップルと代理母が同じように親密な関係になれるかどうかわからない。しかし、彼らは所得が高いのでお金で解決することができる。そうなれば、代理出産の費用がさらに高騰するだろう。

代理母がもらうお金は、16,000 シェケル(約 480 万)くらいだが、高い例では 8 万 5 千ドルというものもあった。もし経済力がある依頼者が参入すれば、医学的な理由で子どもを産めない女性は、代理出産を依頼できなくなるかもしれないし、少なくとも、もっと待たなければならなくなるだろう。ゲイカップルが依頼者の資格を得れば、国内の代理出産の需要と供給に大きな変化がもたらされる。現在、卵子提供が必要なケースでは、代理母が渡航して移植するというも行われているが、ゲイカップルが依頼者となれば、そのような形がもっと広がるかもしれない。

ゲイカップルの代理出産は非常に創造的(creative)な行為だと思う。ゲイカップルの場合、カップルの精子を使ってドナー卵子と代理母の二人の女性を使ってそれぞれの遺伝的繋がりがある子どもを作る。それは、異性愛カップルが代理出産を依頼するのとはかなり異なっていると思う。ゲイの代理出産に反対すると、すぐに差別的だと非難される。しかし、それは別の事だと思う。

(了)

Dr. Etti Samama

専門: 看護学、ソーシャルワーク
所属: イスラエル健康省
論文: Written by Nuphar Lipkin and Etti Samama, Edited by Daphna Rosenbluth. Surrogacy in Israel : Status Report 2010 and Proposals for Legislative Amendment (http://isha.org.il/wp-content/uploads/2014/08/surrogacy_Eng001.pdf)

Isha L'Isha – Haifa Feminist Center (<http://isha.org.il>)

Ministry of Health, Israel (<http://www.health.gov.il/english/Pages/>)

まとめ 日比野由利

※このインタビューは「平成 27 年度厚生労働省 子ども・子育て支援推進調査研究事業 諸外国の生殖補助医療における法規制の時代的変遷に関する研究」によって行われた。インタビューをまとめるにあたって、発言者の意図を損なわないように再構成した。文責は発行者にある。